

【聖書】

使徒言行録 8: 12 しかし、フィリポが神の国とイエス・キリストの名について福音を告げ知らせるのを人々は信じ、男も女も洗礼(バプテスマ)を受けた。13 シモン自身も信じて洗礼(バプテスマ)を受け、いつもフィリポにつき従い、すばらしいしるしと奇跡が行われるのを見て驚いていた。

14 エルサレムにいた使徒たちは、サマリアの人々が神の言葉を受け入れたと聞き、ペトロとヨハネをそこへ行かせた。15 二人はサマリアに下って行き、聖霊を受けるようにとその人々のために祈った。16 人々は主イエスの名によって洗礼(バプテスマ)を受けていただけで、聖霊はまだだれの上にも降っていなかったからである。17 ペトロとヨハネが人々の上に手を置くと、彼らは聖霊を受けた。

18 シモンは、使徒たちが手を置くことで、“霊”が与えられるのを見、金を持って来て、19 言った。「わたしが手を置けば、だれでも聖霊が受けられるように、わたしにもその力を授けてください。」20 すると、ペトロは言った。「この金は、お前と一緒に滅びてしまうがよい。神の賜物を金で手に入れられると思っているからだ。21 お前はこのことに何のかかわりもなければ、権利もない。お前の心が神の前に正しくないからだ。22 この悪事を悔い改め、主に祈れ。そのような心の思いでも、赦していただけるかもしれないからだ。23 お前は腹黒い者であり、悪の縄目に縛られていることが、わたしには分かっている。」24 シモンは答えた。「おっしゃったことが何一つわたしの身に起こらないように、主に祈ってください。」

25 このように、ペトロとヨハネは、主の言葉を力強く証して語った後(のち)、サマリアの多くの村で福音を告げ知らせ、エルサレムに帰って行った。

1 二つのグループ

先週は召天者記念礼拝でヨハネの福音書に聞きました。今週の聖書は、使徒言行録に戻り、二週間前の 10/30 の礼拝とほぼ同じ箇所です。10/30 には、魔術師シモンを中心に見ました。今日は、サマリアの人々に聖霊が降ったことを中心に、聴いてみたいと思います。

少々復習をします。エルサレム教会ができて暫くすると、教会の中に二つのグループがうまれました。一つは、エルサレム教会のももとのメンバー、イスラエルで生まれ育ち、アラム語を話す人たちです。使徒達を始め、主イエスにガリラヤから付き従って来た人々は、こちらのグループに入ります。もう一方は、外国で生まれ育ち、ギリシャ語を日常的に話す人々です。使徒達がエルサレムで伝道することによって、教会へ新たに加えられた人々の中には、外国から戻って来たギリシャ語を話す人々がいたようで

す。第七章の終わりで石打ちの刑で殺されたステファノ、また、今日の聖書に出て来るフィリポは、ギリシャ語を話すグループのリーダーでした。この二つのグループ間には対立があったことが使徒言行録第六章に描かれています。

そのステファノの殉教の直後、エルサレム教会に対して大迫害が起こります。この時、迫害されてエルサレムを追われた教会のメンバーは、ギリシャ語を話す人々でした。同じエルサレム教会でも、イスラエルで生まれ育った者達は、教会に残ることができました。ペトロをはじめとした使徒達もそうです。迫害がギリシャ語グループに集中したのは、エルサレムのユダヤ人たちが、外国で生まれ育ちギリシャ語を話す人々一般を一段も二段も低く見ていたからではないか、と考えられています。

## 2 使徒達の権威

このことを踏まえて、今日のエピソードを読むと、なんだかすっきりしない思いになります。フィリポがサマリアの人々に与えたバプテスマでは聖霊は降ってくださらなかった、なのに、使徒であるペトロとヨハネが手を置くと、聖霊が彼らの上に降ってくださった、とあります。外国で生まれ育ったフィリポよりも、イスラエルで生まれ育った使徒達の方が偉い、という事でしょうか。それとも、今日の聖書は、使徒が特別の権威を語っていることを語っているのでしょうか。

そうです、確かに使徒達は特別な存在です。主イエス・キリストが多くの弟子たちの中から、夜を徹して祈り選んだのが、十二人の使徒達であり、彼らは、主イエスの十字架と復活、昇天まで全て身近に経験しています。特別な権威がある人々と言えるでしょう。

しかし、「使徒達の権威」は、魔術師シモンが考えたようなものではありません。シモンは、ペトロとヨハネが人々の頭に手を置くと、聖霊が降るのを見て「聖霊を与える力を私に与えてください」とペトロとヨハネの所に金を持ってきました。シモンは、ペトロとヨハネに、聖霊を自由自在に操る権能がある、と思ったのです。しかし、それは大きな間違いです。シモンだけではありません、私達もしょっちゅう勘違いする間違いです。聖霊は、霊なるみ神、いくら使徒とはいえ、神である聖霊を自由自在に操る力はありません。だからこそ、ペトロとヨハネは、手を置く前に、「**聖霊を受けるようにとその人々のために祈った。**」(15節)のです。それから、サマリアの人々の上に手を置くと、聖霊なる御神が二人の祈りに応えて降ってくださいました。ですから、使徒達の権威は聖霊を操ることではない、もっと別の事です。それは後で考えてみます。

## 3 聖霊が降ってくださる、とどうなるのか。

さて、今日の物語に描かれているように、洗礼を受けることと、聖霊が降ってくださることには、時差、タイムラグがあることが多いようです。使徒言行録の他の箇所でも、洗

礼と聖霊降臨との間に時差がある逸話が記されています。洗礼を受けたからと言って、必ずしもすぐに聖霊が降ってくださるわけではない、というのは、「聖霊が、霊なる御神である」ことに適っています。人間である聖職者が行う儀式という一面を持つ洗礼で、霊なる神を操ることはできないのです。

では、聖霊なる御神が降った時に、何が起こるのでしょうか。聖書には、人々が聖霊に満たされると、不思議なことを行う場面が出てきます。喋れなかった外国語を喋れるようになる、とか、我を忘れたトランス状態になり、熱狂的に誰も理解できない「異言」、不思議な言葉を語るようになる等です。しかし、現代を生きる私達キリスト者がそのような経験をする事は、めったにありません。では、私達には、聖霊が降ってくださっていないのか、聖霊が満ちてくださっていないのでしょうか。そうではありません。私達にも聖霊なる御神が降ってくださっています。

では、聖霊なる御神が降ってくださると私達はどのようになるのか。それは、使徒言行録第一章8節、父なる御神の御許に帰る直前の復活の主イエスが語っておられる通りです。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」(1:8)。聖霊なる御神が降られ満ちてくださると、私達は、十字架と復活の主イエス・キリストがどのようなお方か、証言する証人と変えられる、そう主は仰っているのです。だから、使徒達の権威というものは、イエス・キリストの証人としての権威であり、力なのです。使徒達ほど、主イエスを実際に知っており、証言できる者達はいないので、すから。

#### 4 キリストの教えに生きる者

そうです、イエス・キリストを知らねば、「証言」することはできません。しかも、頭で考えて知るだけでは、主イエス・キリストの証人とは言えないのです。実際の裁判の場で、「私は本でこの事を読みました。だから、証言します」と語ったとして、それが証言として採用されるでしょうか。されないでしょう。実際に自分の身で経験し、見聞きしたことを話すことが証言であり、話す者が証人です。

ですが、フィリポも、サマリアの人々も、そして私達も、主イエスが神の御許に帰って行ってから、福音を聞いた者達です。主と実際に会い、交際して主を知り、証人となる事は出来ません。一方、聖霊なる御神は、父なる御神と主イエス・キリストのもとから来られる方、と聖書は語ります。主のことも父なる御神のこともよくご存じです。だから、聖霊なる御神が降られ、私達の内に、私達の中に満ちてくださって初めて、私達は、主イエス・キリスト、父なる御神と出会い、経験することができるのです。

では、聖霊なる御神は、どのようにして私達を主イエスと出会うさせてくださり経験させてくださるのでしょうか。聖書を読むことでしょうか、祈ることでしょうか、感謝し、賛美し、礼拝することでしょうか。それら全てを通して、私達は主イエス・キリストを経験する、知

るのだと思います。先ほどの言葉で、主は「**聖霊が降ると力を受ける**」と仰いました。聖霊は、私達が聖書を読み、祈り、感謝し、礼拝する事を通じて、主イエスと出会えるように、力を奮ってくださるのではないのでしょうか。

しかし、聖霊が私どもに与えてくださる力は、それだけではありません。私達が、イエス・キリストの教えに従って生きようとする力、キリスト・イエスの道を選びとろうとする力でもあります。イエス・キリストに生きる力と言ってよいでしょう。更に、別の言葉では、神の言葉に従って生きる、神のご支配のもとに生きる、神の国にこの地上で生きる力とも言えましょう。

何故なら、繰り返し説教で語っていることですが、「敵を愛しなさい」に代表される主イエスの教えは、とても私達人間の力で選び取り、実行できるようなものではないからです。私達は考えてしまう。「人間なんだから、敵なんか愛せるわけない。憎んで当然だ、やられたらやり返して当然だ」。人間の考えだけで言えば、これらは当然なことです。それが人間の限界です。しかし、イエス・キリストと出会った時、「敵を愛せるわけない」という回答が、最終的な答えではないことを知らされるのです。人となってくださった神の独り子は、十字架の上でご自身を殺す者達の為にとりなされた方、「敵を愛する方」であったからです。

私達が、「あなたの敵を愛しなさい」という主の教えを守ろうとしなければ、真に主イエスの苦しみや痛み、それらを遥かに凌駕する神の愛を経験することは少ないのではないかと私は思います。確かに、敵を赦し愛することは、非常に難しいこと、生存本能に反することです。怒りがわいてきます、敵のことを考えるだけで苦しい。「彼らを赦すと、自分が傷つけられるのではないか、不利になるのではないか」と不安にもなります。それは、真の人となってくださった主イエスも同じであったでしょう。

しかし、主イエスは、そんな怒りや葛藤や不安をものともせず、神を神とできない私達人間を愛する事を決断し、実際に十字架に架かり罪を贖ってくださいました。主の義なる愛がどれほどに深く大きく強いものか、聖なるものか、私達は、イエス・キリストの教えに生きようとして、初めてこの身で経験するのではないのでしょうか。その時、私達はキリスト・イエスと出会うのです。

しかし、私達力だけでは、このような主の教えを守ろうとする道を選び取ることは到底できません。できないからこそ、父なる御神と主イエス・キリストは、霊なる御神、聖霊を与えてくださいます。私達ができる事であるなら、聖霊なる御神は必要ありません。私達は、この聖霊なる御神に縋り、このお方の御力によって、主イエス・キリストの教えを生きる道を思い切って選ぶことができるようになるのです。

主イエス・キリストの教えに生きる道は、人間の目には、不可能な道、狭くて不自由な道に見えます。ですが、聖霊の御力によって、実際に主イエスの道へと一步を踏み出してみると、それがとても広々とした自由な道であることに気づかされます。狭い人間の誤った思いに囚われるのではなく、父なる神、子なる神、霊なる神の限界なく広く



正しい愛の世界を自由にのびのびと飛び回ることができる生き方です。これこそ、喜びに満ちた生き方です。主キリストの証人とは、聖霊の御力により、主イエスの道を生きる喜びを経験している者とも言えるでしょう。

## 5 祈る者、神を愛する者

さて、洗礼を受けたからと言って、必ずしもすぐに聖霊なる御神が降ってくださる、とは限らない、と先ほど申し上げました。残念ながら、私達の教会にも、洗礼を受けてから、礼拝からも教会からも遠ざかっている方々がたくさんいます。では、洗礼は全くの無駄なのでしょうか。

いえ、そうではありません。天の御神は、洗礼を受けてからどんなに長い時間が経っても、時を見計らって、御前に招いてくださいます。洗礼を受けた人々を決してお忘れにはなることはない、と私は思います。

先月天に召されたO兄も、そのようなお一人です。O兄は、高校生の時に洗礼を受けましたが、社会人になってから、教会から離れてしまいました。約六十年間、神とは全く関係なく歩みます。O兄は神のことを忘れていたのかもしれませんが、神は覚えておられた。彼が聖隷横浜病院で癌の宣告を受けた日の帰宅途中で、横浜ナザレン教会の看板を見つけました。幼少期、両親に連れられて九州のナザレン教会に通った記憶が甦ったO兄は、次の日曜日、教会を訪ねました。それ以来五年半、礼拝に通い続けました。最期の四カ月半は、聖隷病院緩和病棟とホスピスで療養し礼拝には来る事は出来ませんでした。しかし、彼は、まさに礼拝から離されてから、自分の罪と向き合い、悔い改め、イエス・キリストが復活されたことと永遠の命を信じます、と告白します。そして、平安のうちに天国へと旅立ちました。もし、神から離れて久しいO兄があの日、横浜ナザレン教会の看板を見つけていなかったら、彼の最後の日々はどうなっていたのでしょうか。それまで何度も通っていたのに、看板には気づかなかった。だが、その日に限ってたまたま目に入った…天の御神は、60年間、ご自身から遠ざかったO兄を忘れずにおられた。そして、彼が神の支えを最も必要とする時、看板に気付くようにしてくださったのではないかと、思います。

最後にパウロの言葉を紹介して終わります。「神を愛する者達、つまり、ご計画に従って召された者達には、万事が益となるように共に働く、ということを私達はよく知っています。」聖霊を受け、聖霊に満たされて、主イエス・キリストを経験した証人達は、神の深い愛を知り、神を愛する者へと変えられていきます。だから、主の証人とは、神を愛する者です。フィリポも、ペトロ、ヨハネもそうでした。彼らをめぐる状況は決してよいものばかりではありません。迫害が教会を分断しました。教会の中にも差別的な感情や、仲間に対して優越感を持つ人もいたでしょう。差別された人々は、「あいつらに、私達の気持ちはわかるものか」というような反感を持った者達もいたに違いありません。ひょっとしたら、フィリポや使徒達の心には、お互いに対する対抗心があつたかもしれ

ません。主イエスの証人と言えども人間ですから、考えられることです。

しかし、天の父なる御神は、そのような人間的なことさえも用いて、ご自身の目的・サマリアの人々が聖霊なる御神を受け主イエスの証人となるようにしてくださいました。そして、フィリポやペトロ、ヨハネも又、証人として成長させてくださいました。まさにキリストの証人達の為に「全てのことが益となるように共に働く」のです。

私達もこのことを心に刻みつけたいと思います。試練の中にあっても、苦難の中にあっても、聖霊の御力により縋り、イエス・キリストの名によって父なる御神を求めて、愛するイエス・キリストの道を教会の仲間と共に、歩んで行きたい、と心から願います。